保護者の方へ　お子さまが予防接種を受ける前にお読みください

１　予防接種の効果と副反応について

予防接種は、感染症の感染、発症、重症化の予防や、感染の拡大を防止するために行われています。予防接種を受けたかたの多くが、その疾病に対する免疫を獲得しますが、100%ではありません。

また、接種後に、軽い副反応がみられることがあり、極めて稀ですが、重い副反応がおこることがあります。予防接種後に見られる副反応としては、下記のとおりです。

（1）　通常見られる反応

ワクチンの種類によっても異なりますが、発熱、接種局所の発赤・腫脹（はれ）、硬結（しこり）、発疹などが比較的高い頻度（数%から数十%）で認められます。通常、数日以内に自然に治るので心配の必要はありません。

（2）　重い副反応

予防接種を受けたあと、接種局所のひどい腫脹（はれ）、高熱、ひきつけなどの症状がある場合は、医師の診察を受けてください。お子さんの症状が予防接種後副反応報告基準に該当する場合は、医師から厚生労働大臣へ副反応の報告が行われます。

ワクチンの種類によっては、極めてまれ（百万から数百万人に１人程度）に脳炎や神経障害などの重い副反応が生じることもあります。

（３）紛れ込み反応

予防接種を受けたしばらく後に何らかの症状が出現すれば、予防接種が原因ではないかと疑われることがあります。しかし、たまたま同じ時期に発症した他の感染症などが原因であることが明らかになることもあります。これを「紛れ込み反応」と言います。

２　ワクチンごとの副反応について　　※該当する予防接種の欄をご覧ください。

◆ジフテリア・百日せき・破傷風・不活化ポリオ　（ＤＰＴ－ＩＰＶ　四種混合ワクチン）

2012 年 11 月 1 日から、四種混合ワクチンの定期接種を開始しています。副反応として、発熱や注射部位の発赤、腫脹（はれ）、しこりなどがあります。ごくまれに、ショック、アナフィラキシ―様症状、血小板減少性紫斑病、脳症、けいれんがあらわれることがあります。

◆ジフテリア・破傷風　（ＤＴ　二種混合ワクチン）

予防接種後健康状況調査報告書平成 23 年度後期分（以下「健康状況調査報告」）によると、注射部位の発赤・腫脹（はれ）、硬結（しこり）などの局所反応が主で、33.1%でした。また、38.5℃以上の発熱が 0.6%でした。

◆ポリオ（急性灰白髄炎）ワクチン

2012 年 9 月 1 日からポリオの定期予防接種は従来の生ワクチンにかわり、不活化ワクチンが使用されています。国内での臨床試験において、接種後 7 日間の副反応は、注射部位の疼痛（痛み）8.1%、発赤 66.2%、腫脹（はれ）37.8%でした。また、37.5℃以上の発熱が 14.9%ありました。重い副反応として、ショック、アナフィラキシー様症状、けいれんがあらわれることがあります。

◆結核　（ＢＣＧワクチン）

接種後 10 日頃に接種局所に赤いポツポツができ、一部に小さいうみができることがあります。この反応は、接種後 4 週間頃に最も強くなりますが、その後は、かさぶたができて接種後 3 か月までには治り、小さな傷あとが残るだけになります。これは異常反応ではなく、BCG 接種により抵抗力（免疫）がついた証拠です。自然に治るので、包帯をしたり、バンソウコウを貼ったりしないで、そのまま清潔に保ってください。ただし、接種後 3 か月を過ぎても接種のあとがジクジクしているようなときは医師に相談してください。

副反応としては、接種をした側のわきの下のリンパ節がまれに腫（は）れることがあります。通常、放置

して様子をみてかまいませんが、ときにただれたり、大変大きく腫れたり、まれに化膿して自然にやぶれてうみが出ることがあります。このようなときは医師に相談してください。

また、お子さまが結核にかかったことがある場合は、接種後10日以内に接種局所の発赤・腫脹（はれ）及び接種局所の化膿等をきたし、通常2週間から4週間後に消炎、瘢痕化し（傷あとができて）、治癒する一連の反応が起こることがあります。これをコッホ現象といいます。コッホ現象と思われる反応がお子さまに見られた場合は、接種を受けた医療機関に受診してください。この場合、お子さまに結核を感染させた可能性のあるご家族の方も医療機関を受診するようにしましょう。

◆麻しん・風しん（ＭＲ　麻しん風しん混合ワクチン）

副反応の主なものは、発熱やじんましん、発疹があり、１期目の接種後38.5℃以上の発熱が9.5%、じんましんが2.0%、発疹が4.0%でした。2期目の接種後38.5℃以上の発熱が3.2%、じんましんが0.8%、発疹が0.3%でした。（健康状況調査報告）

これらの症状は接種後13日以内に多く出ます。なお、接種直後から数日中に過敏症状と考えられる発熱、発疹、そう痒（かゆみ）などがでることがありますが、1～3日で治ります。

ごくまれにアナフィラキシー様症状、血小板減少性紫斑病、脳炎、けいれんなどの重い副反応が起こることがあります。

◆水痘

軽微な発熱・発疹および局所の発赤・腫脹が約7%に認められました。その他、稀に接種直後から翌日にかけて、過剰反応（発疹、じんましん、紅班、そう痒、発熱等）があらわれることがあります。重大な副反応としては、稀にアナフィラキシー、急性血小板減少性紫斑病（100万人接種当たり1人程度）がありますが、ハイリスクの患者に接種した場合、接種後14～30日に発熱を伴った丘疹、水痘性発疹が発現することがあります。このような臨床反応は通常の接種では急性リンパ性白血病患者の場合、約20%とされています。ワクチン接種後に帯状疱疹が生じることがありますが、その発生率は自然水痘に感染した非接種患者に比べて同等ないしは低率とされています。

◆日本脳炎ワクチン

副反応の主なものは、発熱やせき、注射部位の腫脹（はれ）・発赤が見られています。1期初回1回目の接種後は、38.5℃以上の発熱が3.2%、接種部位の局所反応は1.6%、じんましんは0.6%、発疹は1.0%でした。1期追加の接種後では、38.5℃以上の発熱が2.8%、接種部位の局所反応は1.9%、じんましんは0.3%、発疹とけいれんはありませんでした。ごくまれに、ショック、アナフィラキシー様症状、脳炎・脳症、けいれん、急性血小板減少性紫斑病などの重い副反応が起こることがあります。（健康状況調査報告）

年長児の場合、注射の痛みや恐怖。不安から自律神経系が刺激され、接種直後に血管迷走神経反射による顔色不良、気分不良、失神等の症状が起こることがありますが、横になってしばらく休むことで回復します。

３　予防接種による健康被害救済制度

定期の予防接種によって引き起こされた副反応により、医療機関での治療が必要になったり、生活に支障がでるような障害を残すなどの健康被害が生じた場合には、予防接種法に基づく補償を受けられる場合があります。健康被害の程度等に応じて、医療費、医療手当、障害児養育年金、障害年金、死亡一時金、葬祭料の区分があり、法律で定められた金額が支給されます。

しかし、副反応にはワクチンの接種が原因ではなく、偶然、ワクチン接種と同時期に発症した感染症などが原因であることがあります。そのため、その健康被害が予防接種によって引き起こされたものか、別の要因（予防接種をする前あるいは後に紛れ込んだ感染症あるいは別の原因等）によるものなのかの因果関係を、予防接種・感染症医療・法律等、各分野の専門家からなる国の審査会にて審議し、予防接種によるものと認定された場合に補償を受けることができます。

※予防接種による健康被害が生じた場合には、診療した医師、地域保健センターへご相談ください。

これまで記載されている内容をよく読み、十分理解した上で、お子さまの予防接種について、受けるかどうか判断してください。

（問い合わせ）　川口市保健所地域保健センター　TEL　048-256-2022　FAX　048-256-2023